

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 根岸雅史 (根岸)

学位申請者 工藤洋路

論文名 「日本人英語学習者のライティングにおける結束性の特徴」

結論

工藤洋路氏から提出された博士学位請求論文「日本人英語学習者のライティングにおける結束性の特徴」について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は全員一致して博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は、根岸雅史を主査に、副査として、大井恭子教授（千葉大学）、黒澤直俊教授、高島英幸教授、吉富朝子教授を加えた5名で構成された。

論文の概要

本論文は、英語教育におけるライティングに関する論文であり、英作文における接続表現や指示表現の使用傾向とライティング能力の発達の関係性を検証し、英語のライティングの指導や評価への知見を得ることを目的としている。検証の方法は、高校生と大学生に同一の英作文課題を実施し、書かれた英作文の中の接続表現と指示表現の使用頻度と種類を量的に分析した上で、その結果については、両者の英作文を質的に比較分析することをおして、その原因を探っている。分析結果とその考察をもとに、ライティング指導や評価への示唆が述べられている。

本論文は全11章で構成される。

第1章の序論では研究の背景が述べられている。今日の日本の中学校から大学までの英語ライティング指導の現状では、文と文が意味的あるいは構造的に適切につながっている英作文を書く力が不足していると言われている。具体的には、日本人英語学習者の書く作文には、同じ文構造を羅列しただけで話題に発展性のない英文や、話題が文ごとに変わってしまい内容的にまとまりのない英文が見られるということである。文と文とのつながりのある英作文を書くためには、文法的な結束関係を文と文との間に構築することが必要であることから、本論文では、英作文における文法的結束関係に注目し、日本人英語学習者の英語ライティングにおける結束性の特徴を研究対象とすることが示されている。

第2章では、ライティングの全体的な能力やライティング・プロセスの中で結束性を構築する能力がどのように位置づけられているかを概観している。結束性はいくつかの

既成の言語能力モデルの中でその下位項目として組み込まれていることから、全体的なライティング能力の一部を構成する要素であると言える。また、結束性の高い文章を書くことは、包括的なライティング・プロセスからも検証が可能である。一連のライティング行動において、計画段階で創出された言語化されていない抽象的なアイデアから、英語に文章化する段階は書き手にとって認知的負荷が非常に高い。未熟な書き手は、文レベル以下のミクロな処理しか実行できないため、文以上のマクロレベルの処理ができず、結束性を欠く文章が生み出されてしまう。この点においても、ライティング能力と結束性の関係性を見るのが可能であることを示している。

第3章では、本論文で用いる文法的結束性の概念の説明をしている。ライティングにおける結束性の研究の基盤は、Halliday and Hasan (1976) が提示した概念に依る部分が多い。文法的結束性という概念を形成している機能は、指示 (reference)、代用 (substitution)、省略 (ellipses)、接続 (conjunction) の4つである。結束関係は、基本的には文と文との関係を意味するものであるため、結束性の観点をライティング研究に適用すると、文と文との間における意味的そして文法的な関係性を、書き手がどう構築するかに焦点を当てることになる。本論文では、文法的結束性の4つの要素に注目することが述べられている。

第4章では、既成のライティング評価基準において文法的結束性に関わる要素がどのくらい組み込まれているかを概観している。複数の基準から推定できることとして、ある習熟度に達するまでは結束関係が存在しない英文を書くことや、冠詞を結束的に使用することは上級学習者の特徴であることなどが挙げられている。

第5章では、ライティングにおける文法的結束性に関わる先行研究について述べられている。ライティングにおける結束性についての多くの先行研究では、ライティング能力が高い学習者の方が、文法的結束性の構築に関わる接続表現や指示表現の使用頻度が高いとしている。また別の研究では、接続表現や指示表現の使用頻度は、上級レベルの学習者については、減少する傾向があるとしている。つまり、こうした表現の使用頻度は、学習の初期段階では非常に低いが、学習が徐々に進むにつれて、使用頻度が上がり、上級レベルに到達すると、今度は減少していくということである。言い換えれば、接続表現や指示表現の使用頻度については、逆U字型の発達段階を描くということである。さらに別の研究では、表現の使用頻度ではなく、使用できる種類数が全体的な能力と相関関係にあるとしている。個別の表現を調査した研究によれば、and、but、because、soはL2学習者が多用する接続語である一方、母語話者は、however、yet、therefore、thusなどをL2学習者に比べて頻繁に使うとしている。日本人英語学習者を対象とした研究によれば、接続表現については、but、so、becauseなどを過剰使用する傾向があり、指示表現については、定冠詞theの使用頻度が低いとされている。英作文の文法的結束性に関わる研究は、近年コーパスによる分析手法が発達し、非常に多くの学習者データから結

束表現の特徴を学習段階ごとに分析できるようになり、さまざまな特徴が判明してきた。その一方で、異なるトピックで書かれた作文同士を比較している研究や、学習段階ごとの傾向を調査した研究のほとんどが横断的な研究であったことなど、全体として調査方法に偏りがあると言える。これらの先行研究を踏まえて、本論文では、日本人高校生と大学生を参加者とし、同一のライティング課題の下で書かれた作文について、文法的結束性の観点から検証することが示されている。また、両参加者に、一定期間を空けた上で、再度同じ課題を実施することで、縦断的研究の要素も取り入れることも述べられている。研究課題は、「(1) 物語文と意見文の文章タイプのそれぞれの作文において、文法的結束性の4つの要素の適切な使用の頻度と種類は、高校生と大学生の間で異なるか」と「(2) 物語文と意見文の文章タイプのそれぞれの作文において、高校生および大学生の学習者における文法的結束性の4つの要素の適切な使用の頻度と種類は、それぞれどのように変化するか」である。

第6章では、研究手法や参加者ならびに採用するライティング課題について述べられている。研究の手法として、高校生と大学生に物語文と意見文のライティング課題を実施し、書かれた作文の中で結束関係を構築している言語表現を抽出し、グループ間でその頻度や種類数を統計的に検定するという方法が採用されている。また、両参加者に、同一課題を一定の期間を空けた後に実施し、同じ観点で、1回目と2回目の間の発達をそれぞれ検証することも行うとしている。横断的手法と縦断的手法の2種類の方法を用いて、日本人高校生と大学生のライティングにおける文法的結束性の特徴を検証することが示されている。

第7章と第9章の前半では、研究課題(1)に対する横断的手法を用いた分析結果とその考察が述べられている。分析結果として、両文章タイプにおいて、大学生が用いる接続表現と指示表現の種類数は、高校生よりも多数であることがわかった。接続詞の *when* など中学で学習した語であっても、高校生のライティングの中では使用があまり見られなかったものがいくつか存在することがその主要な理由の一つである。接続詞の *when* を高校生が英作文の中で使用しない理由は、日本語と英語の文中における接続語句の配置順の違いによると考えられる。指示詞の *the* については、大学生が高校生の使用頻度を上回ったが、これも同様に、日本語にはない文法システムであるため、高校生の使用が見られなかった語であると考察している。次に、高校生は大学生よりも *because* を多用することを、書かれた作文の質的な面から考察した結果、大学生に比べ、高校生は一つの観点での談話を維持できる能力がないことがこの原因と推定している。大学生は、ライティング・プロセスにおいて、熟達した書き手が見せるマクロレベルの処理を実行することが可能であったため、談話を維持することが達成できたと想定している。同様に、順序を表す *first* の使用頻度が大学生の方が高かったことも、マクロレベルの処理が実行されたことによるとその原因を結論づけている。

第 8 章と第 9 章の後半では、研究課題 (2) に対する縦断的手法を用いた分析結果とその考察が述べられている。まずは、高校生の 2 回目では 1 回目に比べて、because の使用が減ったことが判明した。その原因を作文の質的な分析によって探ったところ、because という明示的な標識を用いなくても、内容的な文脈関係を整えることが巧みになったことを理由として挙げている。また、高校生は物語文において、時間・順序を表す表現の使用頻度が増えた。ここで増えた接続表現は主に接続副詞であることから、従属接続詞の when などを使用する大学生の使用傾向とは異なる。つまり、発達は見られるが、この発達は、大学生にまだ近似していない段階での発達であることを示している。同じように、高校生では意見文における指示表現の使用頻度が向上したが、個別の表現から検証する限り、大学生の使用傾向とは異なることから、この高校生の発達は第一歩の発達であって、まだ大学生の使用傾向には近づいていない。つまり、発達の段階性の存在がこの研究により認められた。一方、大学生に関しては、1 回目と 2 回目では、ライティング能力の大きな変化が見られなかったことにより、結束性に関わる表現の使用傾向はほとんど変化しなかった。

第 10 章では、本研究の結果と考察から得られる教育的示唆が述べられている。和文英訳がライティング指導で重点的に扱われているが、文と文とのつながりのある文章を書く力を養成するためには、複数の文を書く活動をより多く取り入れることの必要性が指摘されている。また、接続表現や指示表現を単に多く使うように指導するだけでなく、談話の内容的な展開を踏まえた上で適切な表現を使うことを指導することが重要であり、本研究から推定される文法的結束性にかかわる発達段階を考慮した上で指導をしていくことが必要であることが示されている。

第 11 章では、本研究の今後の課題が述べられている。今後の課題として、2 種類の参加者の能力差を同一基準で測定することや、文章タイプごとに複数のライティング課題を設けることの必要性などが挙げられている。こうした課題を考慮した上で、追研究を行うことによって、ライティングにおける結束性の特徴がより解明されることが期待されるとしている。

審査の概要及び評価

高い評価を与えられる点は以下の 4 点である。① 従来、横断的研究が中心の中、縦断的な要素も研究デザインに取り入れ、先行研究において見解の割れている問題について、一定の結論を示すことができた点。② 物語文と意見文という異なる文章タイプにおける結束性の現れ方を分析した点。③ when 節や if 節の日本人学習者による習得の違いなどを、実際の英作文データをもとに、明確に解明した点。④ ライティング活動の複雑な全体像をモデル化し、指導や評価のための具体的な示唆を発達段階に応じて提示した点。

各審査委員より疑問もしくは批判として指摘のあった改善の余地のある点は以下の諸点に集約できる。(1)結束性の指導というのは、ライティング指導において部分的であるが、全体的指導の中にどう位置づけるのか、(2)データの処理における頻度の計算方法で換算値が使われているが、その選択根拠は何か、(3)高校生と大学生という参加者の2つのグルーピングは、単に英語力という変数だけでなく、知的能力という変数も入ってしまったのではないか、(4)結束性の発達における逆 U 字型発達という興味深い現象を示しているが、それぞれのレベルの参加者のデータを2回ずつ取っただけで、その間がどうなっているのかは必ずしもわからないのではないか、(5)結束性の表現の発達を、文法的結束性という観点からのみ分析したことはスコープがやや狭すぎたのではないか、という点。

(1)の点については、まずはある程度のまとまった量の文章を書くことが前提であり、その上で、統括性のある文章を書くという指導の中で結束性に関する具体的な指導をある程度明示的に行うべきであること、(2)の点には、現実的制約や解釈のしやすさなどのために、このような決定がなされたこと、(3)の点には、知的能力のような変数も入った可能性はあるが、そうした変数を規定し、統制することは現実的に困難であったこと、また、(4)の点に対しては、現実的に同じ課題を頻繁に出し続けることは、現実的でない上に、そこに学習効果が生じてしまうため、関連研究の成果などと併せて、結果を解釈した、との説明があった。さらに、(5)については、今回の調査結果を踏まえて今後の発達的研究で検証すべき課題であるという見解が示された。口述試問では、審査員からのこうした疑問や批判点に対して、自身の研究の限定性を明確に認識した上で、いずれも説得力のある回答を行った。よって審査委員会は全員一致して冒頭に述べた結論に達した。